

(別紙様式 10)

平成 30 年度 北極域研究共同推進拠点 共同研究等報告書

申請区分： 萌芽的異分野連携共同研究 共同推進研究
 産学官連携フュージビリティ・スタディ
 共同研究集会 産学官連携課題設定集会

研究課題名： ”先住民主体の気候変動適応に資する地域研究”ワークショップ の開催

研究期間： 2018 年度

共同研究員	氏名	所属・職名	専門分野	
研究代表者 (拠点内)	立澤史郎	北海道大学・助教	保全生態学	
研究分担者 (拠点外)	林 直孝	カルガリー大学・助教	文化人類学	
	マツト=ウォールズ	カルガリー大学・助教	文化人類学	
	久保田亮	大分大学・准教授	文化人類学	
	井上敏昭	城西国際大学・教授	文化人類学	
	近藤祉秋	北海道大学・助教	文化人類学	
研究分担者 (拠点内)	的場澄人	北海道大学・助教	雪氷学	
研究協力者 (注 2)	D. Anderson	Aberdeen 大・教授	環境人類学	
	B. Forbes	Lapland 大・教授	地理生態学	
	大石侑香	国立民族学博物館・助教	社会人類学	
	野口泰弥	北海道立北方民族博物館	博物館学	

(注 2) 計画申請書に含まれていなかった方でも結果的に本共同研究に参画された方(招へい者等)が居られれば、研究協力者として記述して下さい。

【研究の内容】

(1) 図表や写真も交えて、研究の内容や成果等を 1000 字程度で簡潔に以下にまとめてください。

気候変動下にある北極域社会の住民は、いま、その急速かつ多面的な変化に対して、文化的・民族的なアイデンティティを失わず適応することを迫られている。では、地域住民と関わりながらいわゆるフィールドワークを行う研究者は、そこにどう貢献できるだろうか。北極コミュニティでは、変動の影響を受ける地元(地域社会)の実態を把握し、外の社会に情報を発信し、地域住民が主体的に適応策を案出・選択できるよう働きかけることが推奨されるが、ではどのような研究がそのモデルたりうるだろう。本企画では、上記のような問題意識から、分野横断的なアプ

ローチで北極域のフィールドワークを実践している日本人研究者に幅広く呼びかけ、その現状と課題について議論し整理した。

当初は1回のワークショップ開催を予定したが、異なる目的で立ち上がった複数の研究グループとも問題意識の共有が図られ、結果的には以下のように準備集会（2018年11月17日）と本集会（2019年2月24日）の2回、いずれも複数のプロジェクトの共催で開催することができた。

第1回合同ワークショップ

日時：2018年11月17日13時-18時

場所：北海道大学アイヌ・先住民研究センター会議室

参加者：約10名

第2回合同ワークショップ

日時：2019年2月24日13時-18時

場所：北海道大学遠友学舎

参加者：約50名

第1回（準備集会）では、日本の研究者による北極圏の地域研究（主にグリーンランド、アラスカ、シベリア）が、比較的地域の特殊性や先住民の立場に立って行われてきており、欧米の研究と比べてもさほど遜色がないくらいにデータが蓄積されてきているものの、研究や活動が個別のかつ埋没的（外への発信が少ない、自己完結的・地域完結的）に行われていること、それゆえ上記のような画一的手法の批判的検討や地域間の比較による相対化や総合化という点でかなり遅れていることが明らかになった。また、北米主導の気候変動社会科学に対抗するような“地域主体の気候変動適応策の提言”を目指す必要があること、そのためには研究だけで完結するのではなく積極的に（特に北極評議会関連の）国際会議や委員会で存在意義を示し、議論を仕掛けてゆく必要性も指摘された。

そこで第2回（本集会）では、北欧および西シベリアの地域社会をフィールドとして特に地域住民と動物資源（生物多様性）の関係についてマルチディシプリナリーな研究と政策提言を積極的に行っている2名の研究者、David ANDERSON アバディーン大教授と Bruce FORBES ラップランド大教授を招聘したワークショップを企画した。残念ながら体調の都合で FORBES 教授の来日は叶わなかったが、アバディーン大で「The North」プロジェクトを率いる ANDERSON 教授の広範かつ先駆的な事例に加え、本企画に賛同して参画された本田俊和氏のプロジェクトとの交流により、人と動物の関係から、地域住民の自主的環境管理・環境利用主権という北極政治学の先端的課題へと議論が接続し、より一般的・普遍的な問題意識として共有することに成功した。

また本集会では、プロジェクト横断的かつ海外の先端的リーダーとの直接的対話の場を作る試みが高く評価され、国際的な共同研究への展開も見据えて次年度も同趣旨の企画を継続（申請）することとなった。

(2) 本共同研究に関連する活動（出張、研究打合せ、会合等）を実施した場合には、延べ参加人数が算出できるように、下表に記入してください。

日程(月日)	日数 A	活動内容	場所	共同研究員・研究協力者の参加者名	参加者数 B	延人数 A × B
2018.11.17.	1	ワークショップ	札幌	立澤史郎、林直孝、近藤祉秋、井上敏昭、大石侑香、野口泰弥、的場澄人	10	10
2019.2.24	1	ワークショップ	札幌	立澤史郎、林直孝、近藤祉秋、井上敏昭、大石侑香、野口泰弥、D.Anderson	50	50
2019.2.25	1	研究打ち合わせ	札幌	立澤史郎、林直孝、D.Anderson	3	3

【特許等】

ありません

【本共同研究の枠組みで実施した集会(注4)等】

上記ワークショップ2件以外にはなし。

【本共同研究の発展】

本共同研究の成果が科学研究費などの外部資金の応募やプロジェクトに発展した例があればご記入ください。

1. ベルモント・フォーラム関連公募「持続可能な地球を目指した研究」(TaSE、PI : D.Anderson)
立澤・近藤が参加、不採択。
2. EU の HORIZON2020 「Climate Action, Environment, Resource Efficiency and Raw Materials」に応募中 (PI : B. Forbes、立澤参加)。